

The English Department Newsletter

関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科ゼミナール連合通信 第8号 ● 2020年1月18日発行

「ゼミナール通信」冒頭挨拶

英語文化学科長 松村 聡子

関東学院大学に赴任して二年目になります。初年度はゼミナールを担当することはありませんでしたが、昨年度末の卒業論文発表会は見に行きました。学科全体として卒論発表会の場を提供し、ゼミ連合会委員会の学生が中心となって主体的に卒論発表会を運営していることに感銘を受けました。それぞれの選ばれたゼミの代表が、スーツ着用の上で発表をする、という改まったスタイルは、私にはとても新鮮に見えました。ゼミ単位ではなく学科として発表会を行うことで、ひとくちに英語文化学科といっても、様々な専門分野があって、卒業論文の題目も、研究方法もバラエティに富んでいるということも改めて実感できました。苦勞して卒業論文を書き上げた4年生たちが発表する際の緊張した、でも誇らしげな表情や、そのあとの懇親会での彼ら彼女らの充実感であふれた笑顔も印象的でした。聴衆として来ていた3年生以下の学生にとっても、先輩たちの晴れ姿を目の当たりにできたことは、とても良い刺激になったのではないのでしょうか。

本学では卒業論文の執筆は必須ではなく、残念ながら卒業論文に取り組む学生の数が多いといえる状況ではありません。分量的にも質的にも、普段の授業のレポートよりははるかに高い水準を求められる卒論を執筆することは、もちろん楽なことではありません。途中で考えが煮詰まってしまったり前に進めなくなったり、どうしても論がうまくつながらなくて悩み苦しんだり、ということは卒論を書くときに誰しも経験するのではないのでしょうか。それでも、卒論を書き上げ無事提出できた時の達成感、大学生生活を締めくくる上での集大成として、何物にも代えがたいものがあると思います。社会に出ると簡単には答えが出せない問題が次々と起こってきます。そんなとき、自分でいろいろ考えて、時には苦しみながらも論を練り上げていくという卒論執筆が必要とされる作業の経験が、何らかの形で必ず生きてくるはずです。ですので、卒論を書こうか躊躇している学生は、ぜひ積極的に取り組んでいただきたいと思います。

ゼミナールの語源はラテン語のseminarium（苗床）だそうです。多くの学生がゼミナールという苗床で芽吹き、ゼミ内で切磋琢磨して芽を育て、卒論という形の花を咲かせ、その後の実り多い人生へとつなげていけることを願ってやみません。



ゼミ生たちと私の写真です。

CONTENTS

- ① 学科長挨拶
English Camp 2019
- ② 国際交流演習ハワイサーブス
ラーニング報告
- ③ オープンキャンパス国際文化
カフェ
第68回シェイクスピア英語
劇「十二夜」
- ④ 留学経験学生座談会
- ⑤ 教員採用試験&教育実習体
験談
- ⑥ 就職活動体験談
- ⑦ 教員の研究を研究しよう!
- ⑧ NHKチーフディレクターによ
る特別講演会
卒論発表会/TOEIC-IP試験
Vista

English Camp 2019

English Camp 2019に参加した学生に
インタビューしました。

English CampはMcKim先生を中心としたネイティブスピーカーの先生4人による3日間の英語の授業です。この3日間は英語しか話してはいけないというルールです。しかし授業と言っても、スピーチコンテストやドラマコンテストといったものを通して英語を身につけるいい機会です。2019年度参加者の1年生の宮重さんと作山さんにインタビューしました。

Q. なぜEnglish Campに参加しましたか？

A. 自分自身の英語がどの程度通じるか試すため、後は入学したてというもあり、友達を作る目的もあって参加しました。

Q. 最も印象に残った活動は何でしたか？

A. ドラマを演じたことです。私たち自身演技をするのが初めてで、さらにセリフが英語だったので、とても難しい企画でした。しかし演じてみて、とても楽しくすごすことが出来ました。

McKim先生から

English Campは英語文化学科と比較文化学科のすべての学生を対象としています。しかし、コースの内容は1年生と2年生を対象としています。英語を話そうとする学生を歓迎します。高度な英語スキルは必要ありません。是非皆様も参加してみてくださいね。



プレゼンコンテストを優勝したチーム



参加者の皆さん

国際交流演習 ハワイ・サービスラーニング報告

2019年9月12日～9月20日
アメリカ合衆国ハワイ州

今年度の国際交流演習Ⅱは、ハワイ・ホノルル市内のカピオラニ・コミュニティ・カレッジ(KCC)を拠点に行われました。研修に参加した8人の学生は現地ならではの貴重な経験を通して、様々なことを学ぶことができました。特に印象に残った研修先について、現地研修に参加者した2人の学生にインタビューしました。

参加者：田邊健吾さん

「特に印象に残った研修先はフィッシュポンドです。フィッシュポンドというのはハワイ伝統の魚の養殖施設です。フィッシュポンドには池の淡水に海からの海水を混ぜることで、栄養素が高まり、より多くの魚が入ってくるとされています。昔はそこで、海で生まれた小魚がフィッシュポンドに入ってくると、その中で体に栄養を蓄え大きくなって、いざ海に出ようとする頃には身体が大きくなりすぎて、柵から出ることができずそのまま養殖され、人々の食料源となっていたそうです。私たちが実際に行った作業内容は、白化したサンゴをバケツに入れて向こう岸に渡る作業を繰り返すことでした。白化したサンゴで海と池の間に道を作るそうです。この海と池の間に道を作るまでの作業はしていませんが自分たちの運んだサンゴが使われると聞くと貴重な体験ができたと思いました。今回観光地ハワイとしての印象だけではなく、ハワイの抱えている悩みや課題を知ることができました。実際にサービス・ラーニングの体験を通して一人ひとりが、これまで全く意識しなかったことにも目を向け、旅行先での体験を単純なレジャーではなく、自分の学びに変えられたのではないかと思います。」



作業を終えた参加者と現地団体の担当者

参加者：福島淳平さん

「特に印象に残った研修先はWaianae Mountains Watershed Partnershipです。この団体は流域保護や森林保護の活動を主な活動としています。そもそも流域とは山に降った雨が集められつつ流れる範囲のことをさします。この流域「watershed」はハワイの人々にとってとても大切なものです。なぜならこれがなければあのような豊かな自然環境や綺麗な海がないからです。特に森林では山からの豊富な水によりたくさんの植物が育ちます。それがハワイアンの人々にとっては重要な食料になっていました。よって現在でもハワイアンの人たちはこの流域を重要だと考えこれを保護する活動をしているのです。今回私たちは森林保護の活動のお手伝いをさせていただきました。午前中は以前にこの団体の職員の方が植えたハワイ固有の植物の生育を阻害してしまう雑草を抜く作業をしました。雑草は思いのほか根がしっかりしていてなかなか大変な作業でした。なぜ雑草を抜かなければならないかというと雑草がハワイ固有の植物の生育に大きな影響を及ぼしてしまうからです。かつてハワイに家畜の餌としてGuinea grassという外来種を持ち込みました。しかし、この植物はとても生命力が強い植物でハワイの固有種から生命力を吸い取ってしまいます。これによってハワイの固有の種が育たなくなってしまうのです。このように外来種によってハワイの固有種が育たなくなってしまうのを防ぐために雑草を抜く必要があるのです。午後は団体の職員の方が植えたハワイ固有の植物の種を採集する作業をしました。外来種によって減ってしまったハワイの固有種を増やすために植林や種を植えて数を増やすために種を集めています。この活動によってWaianaeでは固有種の数がとても増えたそうです。この活動を通してハワイアンの人たちがいかに流域や固有種を大事にしているかがとてもよくわかりました。」



現地団体の担当者から説明を受ける参加者

2020年度の「国際交流演習」は、イギリス現地研修になる予定です。それに加えて、English Campが企画されています。English Campは国内で2泊3日の英語漬けの研修を行うというプログラムで、気軽に参加できて英語力も磨けると参加者に好評です。日程、説明会の開催等両企画の詳細については文庫キャンパス内の掲示板に掲載しますので、参加を検討中の皆さんはお見逃しなく！

オープンキャンパス 国際文化カフェ

8月11日と12日の二日間にわたってオープンキャンパスが開かれ、私たちは今年もまた英語文化学科と比較文化学科合同で「国際文化カフェ」を開店しました。国際文化学科の受験を考えている高校生やその保護者に無料でお菓子と飲み物を提供しながら、現役の学生と気楽に相談ができるという企画で、毎年開催されています。

私自身は去年に引き続き、今年もスタッフとして参加したのですが、2年生と3年生の楽しそうに働く姿が非常に印象的でした。会場を訪れた高校生は自分の将来に対して何らかの不安を覚えながらオープンキャンパスに参加しているはずですが、そんな高校生に対して多少の恥ずかしさを感じながらも、積極的に声をかけて、質問や相談に答えられる後輩たちの行動力は素晴らしいと思いました。どれほど美しい言葉を口にしても、行動を伴わなければ意味がありません。「ヤコブの手紙」には“**What doth it profit, my brethren,**

though a man say he hath faith, and have not works? Can faith save him?”（私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行きがないなら、何の役に立つでしょうか。そのような信仰がその人を救うことができるのでしょうか。）とあります。これからも行動によって自らの価値を高められる学生であり続け、充実した大学生活を送って欲しいです。

オープンキャンパスでは、国際文化カフェの他にも留学体験の発表会といった現役学生が参加する企画が実施されたようです。学生の活躍を通して、高校生に国際文化学科を選んでもらえる良い機会になったのではないのでしょうか。（英語文化学科4年 小林 尚也）



第68回シェイクスピア英語劇『十二夜』（Twelfth Night）

安藤ゼミの4年生は昨年、今年と「関東学院大学シェイクスピア英語劇研究会」を観劇に行きました。昨年の『マクベス』に続き、今年は喜劇の『十二夜』が上演されました。この劇は四大悲劇の筆頭、『ハムレット』と同時期に書かれたそうですが、シェイクスピアの喜劇では最高傑作の一つです。

シェイクスピア劇ではかつて英語英米文学科主催で英国劇団の公演が金沢公会堂で開催されていたそうですが、予算の関係もあり現在では行われていないことが残念です。イギリス英語を中心とした本場の公演は、半年後の初冬に開催される本学のシェイクスピア英語劇を観る上でも一つの規範となると思われますので残念なことです。

以下観劇した個人個人の感想を付記します。

「例年感じるのですが、英語圏の俳優のような発音までは望めませんが英語の原文のままここまで演出が完成されているのにはいつも感心します。出演した学生、裏方、指導者、その他関係者の皆さんに敬意を払います。」

「以前から教育関係者や英語関係者の中でも「シェイクスピアなどやっつけてはだめだ」という発言をたまに耳にしますが非常に恥ずかしいことです。このような発言は教養のなさをさらけ出しています。たとえシェイクスピアを専門に勉強しないにしても、上演を楽しむような余裕を持ちたいものです。」

「昨年の『マクベス』に続いて観に行った『十二夜』は、私をまた特別な気持ちにさせました。昨年の『マクベス』は、私が属する劇団新鮮組の一員の見解ではありますが、まぎれもなくイギリスのグロブ座に匹敵する美しさを誇る、まさしく物語（ドラマ）でありました。今年の『十二夜』はそれを果たして越えられるのか、不安をつのらせて観ておりましたが、なんなく越えたすばらしい劇で、シェイクスピア劇の力の可能性に魅せられました。感動を有難う!!」

（英語文化学科4年 及田 将和）



そうだ、留学に行こう。 — 留学経験学生座談会 —

本学の留学制度を利用して海外で学んだ学生に、
ご自身の留学体験についてお話をうかがいました。

今回の誌上雑談会にお招きしたのは4年生で、カナダのサスカチュワン大学に留学した河野沙矢花さんです。

Q. 留学へ行こうと思ったきっかけは何ですか？

河野：中学2年生の時に初めてカナダに行って日本とまったく違う文化に触れ、とても興味深く感じました。その後も休み期間に海外に行ったりして短い期間じゃ出来ないことがたくさんあると思い、留学して自分の力を試したかったからです。そして、外国人の友だちを作りたいと思ったからです。

Q. 留学中一番印象に残ったことは何ですか？

河野：日本のことが好きな現地の方が多くいました。学校で日本のコメディー見てるよって声かけてくれて友達になることも多々ありました。私が日本人だと思って声かけてくれた時は日本語を喋ってくれる方もいました。そして、ご飯に行った時に声かけてくれる人もいました。なので、日本人だからたくさんの方と喋る事が出来ました。



河野さんと大学の先生

Q. 留学へ行くか悩んでいる人へ一言お願いします。

河野：私は留学に5ヶ月間行って行動力と言語力を身に付けることが出来ました。留学には家族や友達と行くわけではないので、困った時に行動し、自分から進んでやる力が自然と身につくようになります。だから、留学に少しでも行きたい方は英語ともう一つ何か自分につけたい力を意識していると自分のためになると思います。留学に行くと言うのは簡単ですが、実際に行ってみるのは難しいと思います。しかし、留学で経験したこと感じたことはこれからの自分の人生に大きく影響すると思います。大学4年間という長いようで短い間に一つ留学という経験はいかがですか。



河野さんとホストファミリー



河野さんとクラスメイト

(英語文化学科4年 松浦 剛志)

目指せ、英語教員！ — 教員採用試験&教育実習体験談 —

教員採用試験と教育実習を体験し、英語教員としてのキャリアをめざす2人の4年次生にインタビューしました。

教員採用試験の受験対策や合格発表までの経緯を、中村亜依香さんにインタビューしました。

中村：私は、毎日何時間も机に向かうことが苦手なので、1年生の頃から教採を見据えて教職科目の教科書を読み、概要をノートにまとめる時間を毎日30分作っていました。3年生で本格的に教採対策を始めた時に覚えている内容が多く、自分のペースに合わせた効率的な勉強法だったのだと思います。また、教員と一般就職で迷っていたため、同時進行で就活も行っていました。エントリーシートを書く上で、自分や生活を振り返る時間を作れたのが教採にもとても役に立ちました。当時はとても忙しい日々でしたが、今では両立して本当に良かったと思っています。



合格通知を喜ぶ中村さん

試験当日は、会場に向かうバスで中学の同級生と出会い、とてもリラックスできました。また、就活を経験したおかげで、筆記試験はあまり緊張せず、面接も自分自身を最大限にアピールすることができました。一次試験は正直手応えを感じていたので、受験番号を見つけた時は安心しました。二次試験の合格発表は本当に緊張して、私の受験番号を知らない友達に先に見てもらいました。今思えば、よく分からない行動ですね。自分の番号を見つけた瞬間は、本当に嬉しくて直ぐに家族全員に報告しました。それと同時に、やっとスタートラインを切れたから今から頑張らなければいけないとやる気が漲りました。4月に向けて、これからもっと努力していきます。

(英語文化学科4年 加藤 美奈)

ここからは、私、遠山友里恵が5月に母校でおこなった教育実習についてお話しします。

教育実習先では中学2年生を担当しました。一日の流れとしては、まず、朝学校に到着したら出勤簿にハンコを押します。空き時間には指導担当の先生のもとで授業の準備を行ったり、英語の授業に限らずほかの教科の授業を見学させていただいたりします。学校の仕組みなどを理解するために「講話」といういろいろな先生のお話を伺ったりもしました。それから教壇実習を行い、お昼になると担当のクラスの生徒たちと一緒に弁当を食べます。放課後には生徒と一緒に掃除をしたあとは、部活動の見学に行きます。生徒たちの帰宅指導を終えたら次の日の授業の授業案を担当の先生に確認させていただいたり、生徒の一日の様子や生徒から受けた相談内容を報告したり、という毎日でした。帰宅時間は早くても21時頃で、遅いときは夜中の1時半頃になることもありました。帰宅した後も授業の準備を行うので、睡眠時間は毎日4～5時間ほどでした。

3週間の実習中、授業が思い通りに進まなかったり、後悔が残るような授業をしてしまったりしたこともあります。でも、「ゆりえ先生の英語の授業楽しい!」や「ゆりえ先生の授業は分かりやすい!」と、授業ごとにポジティブな声を当たり前のようにかけてくれる生徒たちに助けられ、私自身も3週間の実習を楽しく有意義に過ごすことができました。思いやりがあつて人懐っこい生徒たちの卒業していく姿を、私も一緒に見送りたいとなりました。実習前は不安なことしかなかったはずなのに、終わってしまうとあつという間で、一生の思い出に残るとても濃い3週間となりました。

(英語文化学科4年 遠山 友里恵)

就職活動体験談

今年は4名の4年次生にそれぞれの就職活動についてインタビューを行いました。

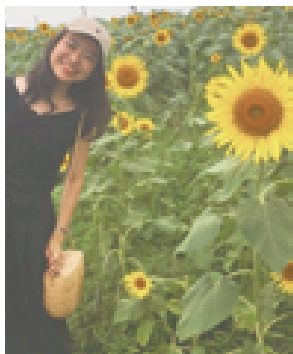
JFEライフに内定…田中雄飛さん



私が実際に就職活動を始めたのは3年生の2月頃でしたが、その当時はやりたい事も無く、自己分析もほとんど出来ていませんでした。また、高校時代は教師になる事が夢だった為、教職課程にも挑戦していたので一旦就職活動を辞め、教育実習を経て6月から再び就職活動に本腰を入れました。まずは自己分析を徹底する所から始め、当初は友人に自分の性格や強みを聞く事もありました。そして、「将来自分がどうなっていたらカッコいいのか」、「自分の強みは何で、どうすればやりがいのある仕事出来るのか」を考えた結果、現在内定を頂いたグループ会社への入社でした。大手のグループ会社であった為、競争率も高く、募集人数も少なく、面接すら受けさせてくれない企業もありましたが、「一度自分で決めたことは何としてもやり抜く。」をモットーに、就職活動においても私の強みとして自己PRで強く主張し続けてきました。

私みたいに在学中にやりたい事が変わった、教育実習があるから周りの人より就職活動が遅れると言った人でも、やり抜く信念さえあればきっと自分の望む企業に出会えるはずです。どうか妥協せずに就職活動を有意義なものにしてください。応援しています。

H.I.S.に内定…大原梨乃さん



私は、人に喜んで貰うことが好きで、人と関わることができる仕事がしたいと思っていました。また、国際という学部にも所属し、留学経験もあったため、海外や英語に関わりたという希望もありました。その中で私自身に1番あっていたのが旅行業界でした。就職活動中はとにかく業界研究、企業研究を細かくし、企業ニュースなども頻繁にチェックしていました。それに加え、文章の添削や面接練習などのため就職センターへ通いました。

準備をしたうえで、何よりも大切だと思ったのは、文面でも面接でも素直に自分の気持ちを伝えるということです。その会社で自分が何をしたいのか、とにかく自分の想いを熱意を素直に自分の言葉で伝えるということを大切にしています。

もちろん、緊張したり不安になったり、時には悲しくなる時もあります。そんな時は、周りの友人と話したり、気分転換をして切り替えるのも就職活動では必要なことだと思います。大変だと思いますが自分らしく、体調には気を付けて、悔いのないように頑張ってください!!

学校法人関東学院に内定…河西祐美さん



私はやりたいことが漠然としていたため、ワークライフバランスを重要視して就職活動を行いました。その中でも、教職課程を履修していたこともあり、教育業界に興味を持っていたためこの内定先を選びました。

就職活動をしていく中で最も大変だったのが自己分析です。逆に言うと、自己分析がしっかりできると就職活動も上手く行くと思います。ここを固めることで、面接でも身構えずにありのままの自分について語ることが出来るようになりました。

私自身本格的に就職活動を始めたのは3年生の3月からですが、企業研究や自己分析など、現時点でも出来ることはたくさんあります。やりたいことがはっきりとしている人はそのために必要なことを、そうでない人は自分は今後どう生きていきたいのかを考えていけば、おのずと道は開けてくると思います。妥協せず、納得のいく就職活動をしてください。応援しています。

日本郵便に内定…山口安弥さん



私は就職活動を3年生の3月に始めました。インターンや自己分析等の対策を何もしていなかったもので、平均より始めるのは遅いと思います。

就活中大変だったことは、自己分析及び自己PR文の作成で自分らしさを出すことです。私は本当にそのことで悩んだので、先輩や就職センターに何度も添削してもらいました。

また企業選びの軸は、社内の人間関係を重視した企業と決めていたので、一般的にホワイトといわれる企業に焦点を当てていました。沢山説明会に参加した中で、私が1番ホワイトだと思った日本郵便に最終的に決めました。アドバイスとしては、最初から業界を狭めず、少しでも興味のある会社や業界にまずはプレエントリーをして、沢山の会社の説明会に行き、そこから優先度の高いものを選んでいくと良いと思います。やりたいこともないし興味のある業界のない人は、たぶん基準がないからそういう考えになると思うので、試しにやってみてください。応援します。

教員の研究を研究しよう！

4人の先生の研究室を訪れ、最近研究しているテーマについてインタビューしました。

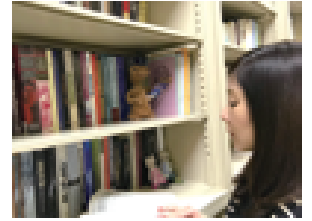
村岡 美奈 先生

Q1. 研究者を志した理由は？

私は主にアメリカ・ユダヤ史を研究していますが、ユダヤ学はとて多様で、勉強をしても全く飽きることがありませんし、常に新しい発見があります。自分でも何がきっかけでユダヤ人にこれほどの関心を持ったのかははっきり覚えていませんが、記憶をたどると小学校高学年の時に見た、ドイツにおけるユダヤ人の子供たちの運命を扱ったドキュメンタリー映画がきっかけだと思います。当時ニュージーランドに住んでいた私は、自分自身も差別を経験したことから関心を持ったのだと思います。ユダヤ人は、イスラエルやアメリカなど世界中の国に住んでいますが、住んでいる国の文化とユダヤ文化を融合させ、独自の文化を形成していることからとても興味深い民族です。

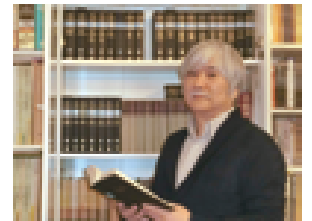
Q2. 最近出席した学会について

6月に上海の学会に参加しました。中国で開催される国際ユダヤ学会ということで、同じアジアの国としてどのような研究が盛んなのか、また同じ非ユダヤ人の研究者が開催するユダヤ学会の内容と運営に関心がありました。中国は日本とは異なり、歴史をさかのぼると1000年ほど前からユダヤ人が住んでいたことが知られています。しかし中国でもユダヤ研究の研究者は少数派のようで、皆さんとても仲が良い印象を受けました。



入江 識元 先生

私たちのゼミの入江先生のご専門は、アメリカ文学、アメリカ政治外交史、航空事業論です。先生の亡きお父上は文豪坂口安吾のご門弟で、父の友人である東京大学名誉教授で文芸評論家の故佐伯彰一氏の教えを受け、難解な英語で有名なヘンリー・ジェイムズを研究し始めました。「既存の批評家の価値評価に抗い、あえて大作に隠れた短編作品にアプローチすることで副専攻の精神分析学を活かして分析できる」と先生は話しておられました。先生はこのほか、19世紀から20世紀前半を中心としたアメリカ政治外交史を研究の柱とされ、主にアメリカの帝国主義政策などの研究に取り組んでいます。入江先生の3つめの研究は航空事業論です。「IT革命とグローバル化は航空業界に深刻な影響を与えていて、LCCや地方空港も問題が山積している」と話される先生は、25年以上大学で就職セミナーや個別の面接指導の経験があり、ご自身の研究に活かされているそうです。このような入江先生の研究は、どれも普段の授業やゼミ活動でもおなじみですね。アメリカの文学歴史や航空、観光業界に興味がある方は是非一緒に入江ゼミで勉強しましょう！



Alan Botsford 先生

I research and have written about 19th-century American poet Walt Whitman. He wrote a poetic experiment titled “Leaves of Grass”, a unique and powerful record of one man’s Personality, as he experienced it, with its aim towards wholeness, self-acceptance, and national identity. Additional research has led me to Emily Dickinson, another 19th-century American poet. Her poems represent a huge amount of energy in a small amount of space—which pretty much describes her spiritual life: bold, rebellious, fiery. Both of these American poets have profoundly influenced 20th- and 21st-century modern American poetry and poetics, which is also a recent research interest of mine. Students in my seminar are encouraged to explore literature of any stripe—novels, poems, or plays.



平坂 文男 先生

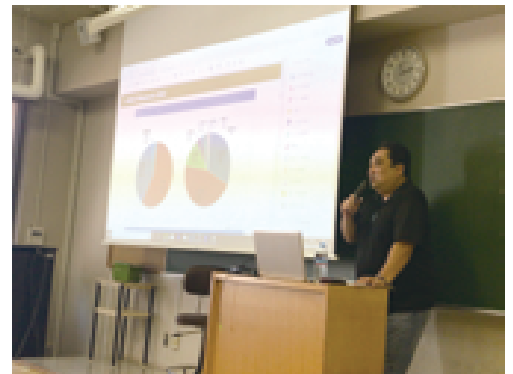
先生が最近行った研究は、Peterson & Barney (1952) の米語母音のデータの内、男性話者によるものを基にして作成した、各母音ごと10000個の合成音声からMCFFにより抽出したメルケプストラム係数を教師データとして米語の各母音をほぼ完全に判別できるまで学習させた、5層の中間層を持つ多層ニューラルネットワークにたいして、日本語の五母音(25名の話者から採取したものを基に、米語の場合と同様に、各母音10000個の合成音声からMCFFによりメルケプストラム係数を抽出した)を評価データとして与えることで、米語の母音体系において日本語の各母音はどのような位置を占めるかを検証することです。

大変難しい内容で、私たちが理解するのはたくさんの勉強をしなくてはならない内容ですが、なぜ先生がこの内容を研修し、立証しようと思ったかという、従来、米語の話者にとって日本語の各母音がどのように認識されるかを調べる場合、Perception Testを行うことが一般的でありましたが、この場合、両言語の話者が共に、均質な方言的バックグラウンドを持つことが必要になるだけでなく、被験者となる米語の話者の人数も統計的に有意となるように十分に多くの数を必要とするため、日本国内において、その条件を満たすようなPerception Testを行うことは難しいと思われていました。そこで、先生は今回の研究をしようと思い、立証しようとしたのです。

NHKチーフディレクターによる特別講演会

去る11月5日(火)に、NHKのチーフディレクターである原田悦志さんをお招きして特別講演会「日本の音楽、世界でウケているの?どうすればウケるの?」が行われました。原田さんはNHKの海外向け音楽番組「J-MELO」の制作などを通じて、J-POPを中心に日本文化を海外に発信してきた方です。その経験を踏まえて、現在の世界の音楽業界における目まぐるしい変化と、その中でJ-POPがどのような形で世界に受け入れられてきたのか、更に今後の展望までをわかりやすくお話しいただきました。

個人的には、CDの売上が落ち込む一方で、YouTubeの爆発的な普及やダウンロード配信、サブスクリプションのサービス充実によって、CDの枚数よりも再生回数がヒットの基準となっているという話題が印象的でした。音楽はスマホで聞くのが当たり前のように感じていましたが、改めて指摘されると面白い現象だと思いました。また、世界の人々のJ-POPへの関心のあり方が次第に変わってきているというお話も興味深かったです。盛りだくさんの内容だったので、正直に言うと、話に付いていくのが少し難しいと感じる部分もありましたが、自分にとっても身近な日本の音楽産業と文化のグローバルな広がりを知る貴重な機会になったと思います。原田さん、ありがとうございました。



(英語文化学科3年 本田 翔一)

2019年度英語文化学科 卒業論文発表会

今年度も英語文化学科に提出された卒業論文の発表会を以下の日程で開催します。

日時：2020年2月1日(土) 13時30分から
場所：K-123教室 (予定)
(※終了後に懇親会を予定しています。)

2019年度 英語文化学科

英語文化学科生対象としたTOEIC-IPテストを今年も実施します。

日時：2019年2月1日(土) 9時20分から
場所：K-310、311教室 (予定)
(※受験費用：無料 [2・3年生対象])

英語文化学科ゼミナール連合会

Vista No.8

▼ゼミナール通信第8号をお届けします。昨年より私たち英語文化学科の学生が英米文学科の先輩方からこのゼミナール通信を引き継ぎ、新たなスタートを切りました。▼今号は昨年までの活動経験を生かして、学科に所属する学生の様々な活動報告を掲載しています。お馴染みの就職活動や教育実習・教員採用試験、留学などの体験記に加えて、新たに「教員の研究紹介」も掲載しています。ゼミ生による4名の先生方へのインタビューから、それぞれの先生の最近の研究や意外な一面が垣間見えるような興味深い内容になっていると思います。これらの記事を通して、本学科の先生や学生たちの活動について知っていただける機会となれば幸いです。▼今回のゼミナール通信第8号の作成にあたり、ゼミナール連合会のメンバーが一つ一つの記事を作成し、協力して一つのゼミナール通信を作り上げていると知り、様々な人の想いが詰まったものであることが分かりました。また、その一員として本号の制作に携われたことを大変嬉しく思います。今後も、これまで以上のゼミナール同士の交流とそれによる英語文化学科全体の活気が一層増すことを願っています。▼このVistaは日本語と英語のダブルテキストで掲載をしています。普段は英文に抵抗があるという方も、是非この機会に読んでみてください。▼最後に発行にあたりご指導、ご協力をいただいたヒース先生、安藤先生、草山先生にはこの場をお借りしてお礼申し上げます。

▼Formerly edited by the Department of English Literature, this newsletter started anew under the Department of English Language and Culture last year. ▼ Following in the footsteps of the previous newsletters, we will focus on the topics concerning students' experiences in job hunting, being trained for the teaching profession, earning teaching license, and studying overseas. In addition, we will be having a teachers' corner where we know their academic researches and interests. We have interviewed four teachers about their latest studies and we will be sharing some interesting aspects of our instructors. We hope that this newsletter will give you an insight on students' and teachers' lives. ▼ Each article in this newsletter was carefully thought of. The members worked together to create a newsletter that would be informative and interesting for its readers. Seeing their efforts in creating this newsletter together, I am proud to be a member of such a dynamic and creative team. I look forward to future interactions with the seminar team members and the further growth of the Department of English Language and Culture. ▼ Vista No. 8 is brought to you in two languages: Japanese and English. Thank you for taking time to read our newsletter. We hope that you have enjoyed it. ▼ Finally, we would like to thank Prof. Heath, Prof. Ando and Prof. Kusayama for all the support and advice they have given us during the preparation of this publication.

(英語文化学科4年 西村 瑞穂)

The English Department Newsletter Vol.8 (英語文化学科ゼミナール通信第8号) 2020年1月18日発行

編集：関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科

編集協力：関東学院大学 国際文化学部 英語文化学科ゼミナール連合会

〒236-8502 横浜市中区金沢3-22-1 TEL. 045(786)7179 URL: <http://www.univ.kanto-gakuin.ac.jp>

印刷所：株式会社なまためプリント 〒231-0006 横浜市中区南仲通 4-43 馬車道大津ビル TEL. 045(641)8080